

## 教員紹介

<b>飯塚 大展 教授</b> 専門分野：日本仏教	
<b>研究内容</b>	中世後期の日本における仏教受容を中心に研究している。 鎌倉時代における仏教受容の一端を遁世者としての視点から考察する意味で、無住道暁の『沙石集』『雑談集』等を講読している。また、室町時代後期以降の禅籍抄物の読解と、それに基づく一休宗純の『狂雲集』『自戒集』の註解とを併行して研究している。
<b>研究業績</b>	1. 『一休和尚全集』第4巻「一休仮名法語集」, 春秋社, 2000年 2. 『一休和尚全集』第5巻「一休ばなし」, 春秋社, 2010年 3. 『永平寺史料全書』禅籍篇 第1～4巻(共著), 大本山永平寺, 2002～2007年
<b>石井 清純 教授</b> 専門分野：禅学	
<b>研究内容</b>	主たる研究テーマは、道元禅師の思想的開明にある。それと同時に、禅の受容の国際化への対応方法についても模索している。 道元禅師は、曹洞宗においては宗祖のひとりとして、また、明治期以降の哲学者にとっては、主著の『正法眼蔵』を中心に、「思想家」として研究されてきた。大学院の演習および研究指導においては、これら、「曹洞宗の宗祖としての道元禅師」と、「思想家・哲学者としての道元」という道元禅師理解の多面性を意識しながら、道元禅師の著述を読み解いてゆく。読み進めるに当たっては、道元禅の海外への伝播を意識しつつ、英訳との対比も行いながら読み進めてゆく。
<b>研究業績</b>	1. 『永平寺選述文献に見る道元禅師の僧団運営』『道元禅師研究論集』(大本山永平寺) 2002年 2. 『訓註曹洞宗禅語録全書 中世編』第1巻「義雲和尚」(共著, 四季社) 2005年 3. 『道元禅師における般若と風鈴』『日本仏教学会年報』72号, 2008年 4. 『原文対照現代語訳道元禅師全集』第17巻, 「法語・歌頌等」(共著, 春秋社) 2010年 5. 『初期曹洞宗における仏弟子の自覚と羅漢供養』『日本仏教学会年報』78号, 2013年
<b>岩永 正晴 教授</b> 専門分野：曹洞宗学	
<b>研究内容</b>	江戸時代に作成された『正法眼蔵』の注釈書を対象とし、特に弁山玄嶺(1711?～1789)述『正法眼蔵聞解』を中心として研究を進めています。その為には弁山及び江戸時代中期以降の宗乗家に最も影響を与えた人物の一人であると思われる面山瑞方の研究が必要となり、目下面山の著述を読み進めています。
<b>研究業績</b>	1. (共著)『原文対照現代語訳・道元禅師全集 第14巻』(春秋社刊, 平成25年) 2. 『宝慶記』における「仏法の総府」について(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第77号, 平成31年) 3. 『宝慶記』における「仏法の総府」について(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第78号, 令和2年) 4. 『道元禅師撰『知事清規』における『文選』『李善注』の依用(『駒澤史学』第90号)
<b>小川 隆 教授</b> 専門分野：中国禅宗史	
<b>研究内容</b>	中国禅宗の思想史的把握を念じつつ、唐宋時代の禅宗文献の校勘・訳読・注解等に従事しています。個々の文献を「实事求是」の精神と厳密な語学的・歴史学的手法によって丹念に読みこんでゆく、それ以外に古人の意を正しく捉える道はないと信じています。大学院の授業では、そうした研究の基礎となる、中国の古典文献および禅宗文献の初歩的な読解訓練を行っています。理論や信念をふりまわさず、まずは書物そのものと虚心に向きあってみよう、そんな方々との出会いを心待ちにしています。
<b>研究業績</b>	1. 『神会－敦煌文献と初期の禅宗史』(臨川書店, 唐代の禅僧, 2007年) 2. 『語録のことは－唐代の禅』正・続(禅文化研究所, 2007年・2010年) 3. 『臨濟録－禅の語録のことはと思想』(岩波書店, 書物誕生, 2008年) 4. 『語録の思想史－中国禅の研究』(岩波書店, 2011年) 5. 『禅思想史講義』(春秋社, 2015年) 6. 『禅の語録』導読(筑摩書房, 禅の語録20, 2015年)
<b>奥野 光賢 教授</b> 専門分野：中国仏教	
<b>研究内容</b>	中国隋代に三論学派(三論宗)を大成した嘉祥大師吉蔵の思想を中心に、吉蔵の教学に大きな影響を与えた鳩摩羅什門下の竺道生、僧叡、僧肇等の思想にも関心をもって研究を続けている。 吉蔵は中国仏教随一の博学として知られ、主要な大乘經典すべてに注釈を著すなどその著述量は中国仏教者の中でも最右翼に位置している。それらの著作の読解を通じて、吉蔵教学が東アジア仏教に与えた影響について考察してゆきたいと思う。
<b>研究業績</b>	1. 『仏性思想の展開－吉蔵を中心とした『法華論』受容史－』(大蔵出版), 2002年 2. 『吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題』(『駒澤短期大学研究紀要』第32号), 2004年 3. 『鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈について』(『駒澤短期大学仏教論集』第10号), 2004年 4. 『吉蔵の法華経観』(『駒澤短期大学研究紀要』第32号), 2005年 5. 『吉蔵撰『浄名玄論』巻第一の註的研究』(『駒澤短期大学研究紀要』第34号), 2006年 6. 『三論宗』(岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』大蔵出版), 2006年 7. 『三論と成実の思想史的意義』(沖本克己編集, 新アジア仏教史第7巻『興隆・発展する仏教』佼成出版社), 2010年 8. 『中観思想の中国的展開』(シリーズ大乗仏教『空と中観』春秋社), 2012年
<b>金沢 篤 教授</b> 専門分野：サンスクリット, インド哲学	
<b>研究内容</b>	いわゆるヴェーダ体制の根幹をなすヴェーダ思想、及びその一発展としての正統バラモン哲学とヒンドゥー教の研究を専門とするが、特に、特異で精緻・豊穡なものである言語哲学、及びその中心的な担い手であるミーマンサー学派ならびにヴェーダダーンタ学派の思想史的解明を中心課題とする。 関連する種々サンスクリット原典の考証とそのフィロロジカルな解読を手掛かりに、常に語義・学説・定説・教理の厳密かつ動的な解明、歴史的批判的研究を目指している。
<b>研究業績</b>	1. 『タントラ学事始－インド学の曙－』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第58号), 2000年 2. 『satya and dharma』(『駒澤大学仏教学部論集』第33号), 2002年 3. 『前生想起と解説－知行併合論の哲学的基礎IV－』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第61号), 2003年 4. 『坐処考－ヨーガ行者のいる風景－』(『駒澤大学仏教学部論集』第34号), 2003年 5. 『ダマヤンティーの美－rupaとvapusを中心にして－』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第63号), 2005年

<b>加納 和雄 准教授</b> 専門分野：インド・チベットの仏教、文化交流史、如来蔵	
<b>研究内容</b>	私の専門分野はインドとチベットの仏教です。とくには、中国、韓国、日本などの仏教に大きな影響をもたらした、如来蔵・仏性思想を研究しています。またその延長にあるインドの密教も扱っています。如来蔵思想は、あらゆる人々に成仏への道が開かれていることを教える思想であり、すぐれた先行研究も数多くありますが、その成立と展開を巡ってはまだまだ研究すべきことが残されています。仏典を、その原語であるサンスクリット語で読み解き、異国語化される前の段階において、本来それがどのような意味を持っていたかを丹念に調べてゆきます。授業では、このようにサンスクリット語の読解を軸に進めて行きます。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <i>Buddha-nature and Emptiness: rNgog Blo-Idan-shes-rab and a Transmission of the Ratnagotravibhāga from India to Tibet.</i> Vienna: Vienna Series for Tibetan and Buddhist Studies, 2016. 488p.</li> <li>2. 「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本—1934年のチベットにおける梵本調査を起点として—」『インド論理学研究Ⅳ』, 2012年, 123-161頁。</li> <li>3. 「『宝性論』の展開」, 下田正弘編, 『シリーズ大乘仏教 第八巻 如来蔵と仏性』, 春秋社, 2014年, 206-247頁。</li> <li>4. 「『普賢成就法』の新出梵文資料について」, 『密教学研究』46, 2014年, 61-73頁。</li> <li>5. 「ヴィブーティチャンドラの詩稿」, 『印度学仏教学研究』66-2, 2018年, 191-196頁。</li> </ol>
<b>木村 誠司 教授</b> 専門分野：インド・チベット仏教	
<b>研究内容</b>	インド、チベットの仏教を、仏教哲学（アビダルマ、abhidharma）を中心に考察する。チベット仏教史書類にも目を向けて、視野を広げたい。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「アビダルマの二諦説—訳注研究—インド編Ⅰ」『駒澤大学仏教学部論集』第43号, 平成24年</li> <li>2. 「雨衆外道（Varsaganya）について—序論—」『駒澤大学仏教学部研究紀要』第72号, 平成26年</li> <li>3. 「『青史』余聞」『駒澤大学仏教学部論集』第46号, 平成27年</li> </ol>
<b>佐藤 秀孝 教授</b> 専門分野：禅学、日本禅宗史、宋元禅宗史	
<b>研究内容</b>	日本禅宗史。鎌倉・南北朝期に中国（宋元）より伝来した禅宗が如何に日本の地に定着していったかを、臨済・曹洞両宗の禅僧の事跡を踏まえて研究考察している。従来、永平道元・瑩山紹瑾を中心とした曹洞宗の形成展開に研究の主眼を置いていたが、最近はとくに宋元から日本に渡来した中国禅僧や入宋・入元して帰国した日本禅僧に視点を当て、鎌倉・南北朝期における臨済宗の形成展開を対象とするようになってきている。具体的には江戸期の禅宗燈史や僧伝史料が編纂刊行される以前の、より素朴な内容を伝える臨済宗禅者の伝記史料を読み進めたい。
<b>研究業績</b>	<p>日本禅宗の形成に大きな影響を及ぼした臨済宗禅僧の伝記史料や禅語録などを細かく読み解くことで、中世禅宗の息吹きを味わうことを目指している。ここ数年はとくに觀山覚阿・明庵米西・永平道元・東福円爾・蘭溪道隆・無本覚心・古澗世泉・無学祖元・南浦紹明・約翁徳俊・一山一寧・東慧日・西澗子墨・大拙祖能などを対象として取り上げている。また普門從拙・拙庵徳光・虚庵懐敏・長翁如浄・無準師範・石溪心月・無門慧閑・虚堂智愚ら南宋禅者が如何に日本僧に接したかについても関心を広げている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『明峯素哲師の生涯』(富山県氷見市, 海慧山光祥寺刊, 平成21年5月)</li> <li>2. 佐藤秀孝・館隆志共編『蘭溪道隆禅師全集第一巻・蘭溪和尚語録』(大本山建長寺, 思文閣出版刊, 平成26年10月)</li> <li>3. 「熊本市本妙寺所蔵『道元禅師頂相』—帰国当初に描かれた道元禅師の姿を偲んで」(『駒澤大学禅文化歴史博物館紀要』第2号, 平成30年1月)</li> <li>4. 「虚堂智愚の住持期の動静(一)～(五)」(『駒澤大学禅研究所年報』第27号～第31号, 平成27年12月・平成28年12月・平成29年12月・平成30年12月・令和元年12月)</li> <li>5. 「無門慧閑の生涯と『無門関』(一)～(三)」(『駒澤大学仏教学部論集』第48号・第49号, 『駒澤大学仏教学部研究紀要』第78号, 平成29年10月・平成30年12月・令和2年3月)</li> </ol>
<b>角田 泰隆 教授</b> 専門分野：曹洞宗学	
<b>研究内容</b>	道元禅師の研究。主として『正法眼蔵』の書誌的・思想的研究。道元禅師のその基礎的研究として、道元禅師の伝記研究はじめその他の著作の研究も行っている。
<b>研究業績</b>	<p>道元禅師の著作の思想的研究では、特に漢文で書かれた著作の伝統的読み方（訓読）において必ずしも妥当であるとは思われないものがあり、それに依るが故に、適切とは言えない解釈が行われている場合がある。伝統は重んじられなければならないが、伝統的なものが正しいとは限らない。</p> <p>『正法眼蔵』の思想的研究においても、その最古の註釈書である『正法眼蔵抄』や江戸期の註釈書や先人の研究成果を手がかりとするが、基本的には道元禅師の他の著作を参照しながら、自ら『正法眼蔵』本文としっかりと向き合うことが大切であると考えている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「『正法眼蔵』編纂の歴史」『道元思想のあゆみ2』(吉川弘文館)1993年</li> <li>2. 「道元禅師の大疑滞とその解決」『道元禅師研究論集』(大本山永平寺), 2002年</li> <li>3. 『禅のすすめ—道元のことば』(日本放送出版協会), 2003年</li> <li>4. 「道元禅師在宋中のこと」『田中良昭博士古稀記念論集・禅学研究の諸相』(大東出版社), 2003年</li> <li>5. 『道元禅師の思想的研究』(春秋社), 2015年</li> </ol>
<b>程 正 教授</b> 専門分野：初期中国禅宗史・敦煌禅宗文献	
<b>研究内容</b>	敦煌遺書から出現した初期禅宗文献を中心に研究を進めている。敦煌禅籍は初期中国禅宗史を窺い知る貴重な資料として発見当初から脚光を浴びてきた一方、いまだ未特定、未整理のものも少なからず存在している。そのために、敦煌禅籍の新資料特定、校勘を基礎作業とし地道に行いつつ、これらを手がかりに初期禅宗史の更なる解明を目指していきたい。
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「唐五代の禅」(共著)『禅学研究入門(第二版)』, 大東出版社, 2006年</li> <li>2. 「初期禅宗における仏弟子の意義—祖統説の成立をめぐる—」『日本仏教学会年報』79, 2014年</li> <li>3. 『敦煌禅宗文献分類目録』(共著), 大東出版社, 2014年</li> <li>4. 「英蔵敦煌文献から発見された禅籍について—S6980以降を中心に—(1)」『駒澤大学仏教学部論集』48, 2017年</li> <li>5. 「英蔵敦煌文献から発見された禅籍について—S6980以降を中心に—(2)」『駒澤大学仏教学部研究紀要』76, 2018年</li> </ol>

■ 教員紹介

<p><b>徳野 崇行 准教授</b>      専門分野：日本仏教の民俗宗教的展開</p>	
<p><b>研究内容</b></p>	<p>日本における弔いの文化について歴史的展開と現状について研究を行っています。歴史的展開については、禅宗の寺院で編纂された「清規」という史料や行法書、仏教説話などから死者や先祖を供養する儀礼の変遷を検討しています。現状については仏教寺院で営まれる供養儀礼や葬祭ビジネスの見本市でのフィールドワークをもとに研究しています。近年は精進料理といった禅をめぐる文化史についても研究領域を広げています。</p>
<p><b>研究業績</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「近世版本に描かれた仏壇と位牌 — 山東京伝の合巻を手がかりにして—」『宗教学論集』34輯, 2015年</li> <li>2. 「曹洞宗における「食」と修行 — 僧堂飯台, 浄人, 臘八小参, 「精進料理」をめぐって—」『宗教研究』386号, 2016年</li> <li>3. 「近世料理書から見た仏教と食 — 「青物」の料理から「精進料理」へ—」『宗教学論集』37輯, 2018年</li> <li>4. 『日本禅宗における追善供養の展開』(国書刊行会, 2018年)</li> <li>5. 「二〇一七年度 仏教経済研究所 寺院調査レポート 地域社会における寺院の役割(2) — 北海道夕張市の曹洞宗寺院への聞き取り調査から—」『仏教経済研究』48号, 2019年</li> </ol>
<p><b>晴山 俊英 教授</b>      専門分野：曹洞宗学</p>	
<p><b>研究内容</b></p>	<p>道元禅師および曹洞宗における戒律・清規を中心とする研究が領域となる。一見、伝統という名の束縛がイメージされるかも知れないが、その存在理由を探ることにより、曹洞宗の思想的特徴や信仰心、あるいは結果的合理性が窺い得ると考える。そのため、いわゆる仏教学の立場と宗学の立場との差異を意識しながら、種々の文献を解読して行きたい。</p>
<p><b>研究業績</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『原文対照現代語訳 道元禅師全集』第15巻「清規・戒法・嗣書」(春秋社, 2013年7月)</li> <li>2. 『第三期 禅語傍訳全書』第3巻～第6巻「禅苑清規(Ⅰ)～(Ⅳ)」(四季社, 2006年4月～2007年9月)</li> <li>3. 「『梵網経略抄』における懺悔について」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第64号, 2006年3月)</li> <li>4. 「『十六条戒の二重構造とその機能について』(『日本仏教学会年報』第74号, 2009年7月)</li> <li>5. 『道元さまが教えてくれた心のコンパス～『正法眼蔵随聞記』に学ぶ①～』(曹洞宗宗務庁, 2017年7月)</li> </ol>
<p><b>松田 陽志 教授</b>      専門分野：曹洞宗学</p>	
<p><b>研究内容</b></p>	<p>日本曹洞宗において中世から近世にわたって宗旨参究に取り上げられた偏正五位説の解釈の思想的展開を研究対象とする。特に近世江戸期に入り教団の一体性と宗旨の独自性を摸索する中で、五位説を含めた曹洞の宗旨がどのように再構築されていったのかに注目する。具体的には、『五位顕訣元字脚』をはじめとする五位解釈の文献や、永覚元賢『洞上古轍』の流布にともなう「参同契」「宝鏡三昧」の註解文献などから、江戸期の曹洞禅者の宗学的視点について検討する。</p>
<p><b>研究業績</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 江戸期曹洞禅僧の経典・文字観—独庵玄光と天桂伝尊を中心に—(『日本仏教学会年報』77号, 平成24年8月)</li> <li>2. 江戸時代の『参同契』『宝鏡三昧』註解について—月舟系註解の変容と密付説について—(『駒澤大学仏教学部論集』41号, 平成22年10月)</li> <li>3. 江戸期の五位説研究における『洞上古轍』受容の傾向について(『宗学研究』51号, 平成21年4月)</li> </ol>
<p><b>村松 哲文 教授</b>      専門分野：仏教美術史</p>	
<p><b>研究内容</b></p>	<p>中国南北朝期から隋唐までの仏教図像(仏像・仏画)を研究している。仏教美術を芸術の歴史として捉えるのではなく、仏教の歴史、社会の歴史という観点から「かたち」を読み解いていく。例えば敦煌石窟の壁画に描かれた涅槃図や本生図などは、時代によって表現方法が変化するが、その原因を『梁高僧伝』や『魏書』釈老志を読解して図像の変化と関わる点を考察する。さらに観察力を養うために、実作例を極力確認するように努めている。</p> <p>美術史の研究は、文献と作例の研究を車の両輪として、それが上手く回転することにより成り立つといわれる。その絶妙なバランスを身につけることが最大の目標である。</p>
<p><b>研究業績</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「『歴代名画記』にみられる涅槃図の描かれた寺院」『てら ゆき めぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』中央公論美術出版, 2013年</li> <li>2. 「中国における涅槃図の変容」『駒澤大学仏教学部研究紀要』69, 2011年</li> <li>3. 「十大弟子像と八部衆像」『興福寺—美術史研究のあゆみ—』里文出版, 2011年</li> <li>4. 「興福寺阿修羅像の謎」『研究紀要(駒大高校)』27, 2011年</li> <li>5. 「深大寺銅造釈迦如来倚像について」『深大寺展』調布市博物館, 2009年</li> </ol>
<p><b>矢島 道彦 客員教授</b>      専門分野：中期インド語, 原始仏教, ジャイナ教</p>	
<p><b>研究内容</b></p>	<p>私の研究領域は主に2つに分かれる。1つはいわゆるブラークリット(≒中期インド語)で書かれたテキストの研究である。パーリ文献やジャイナ教のアルダマーガディー文献もここに含まれる。こちらは純粋にフィロロジカルな手法によっている。いま1つは、ジャイナ教の思想や文化に関する研究で、とくに仏教との比較を意識しながら研究を進めてきた。近年の最大の関心は「ジャイナ教のマングラ」にある。ジャイナ教の宗教儀礼の重要性を知り、儀礼のテキストと格闘しながら、科研費によるインドへの現地調査もたびたび行ってきた。</p>
<p><b>研究業績</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「Suttanipāta対応索引」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第2号, 1997年</li> <li>2. "Mythical Traditions Relating to a Jina's First Sermon and the Jaina-Maṅḍala", 『仏教とジャイナ教』(長崎法潤博士記念論集) 平楽寺書店, 2005年</li> <li>3. "A Comparative Study of the Mātanga-jātaka and its Jaina Version", 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第12号, 2007年</li> <li>4. "Bhattachāle upatthite : An Example of a 'Mistranslation' in the Pāli Canon", Anusandhāna (Ahmadabad) Vol.51, 2010年</li> <li>5. 『仏教的世界の教育論理—仏教と教育の接点—』(共著), 法蔵館, 2016年</li> </ol>

<b>矢野 秀武 教授</b>		専門分野：宗教学，上座仏教研究
<b>研究内容</b>	専門は、宗教学の観点からの現代タイ上座仏教研究である。とりわけ、上座仏教の集団や思想が持つ社会的影響力について注目している。現地語資料を用いた研究と共にフィールドワークも行う。また、タイ上座仏教や諸宗教の研究が、日本の宗教や宗教研究と接点を持ち、相互に学びあえるような研究を進めるよう心掛けている。	
<b>研究業績</b>	現在取り組んでいるテーマは、タイ人研究者による宗教研究の特質、上座仏教と国家、上座仏教文化優位の社会における他宗教の抱える諸問題などである。	
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『現代タイにおける仏教運動 タンマガーイ式瞑想とタイ社会の変容』、東信堂、2006年</li> <li>2. 『アジアの社会参加仏教 政教関係の視座から』、共編著、北海道大学出版会、2015年</li> <li>3. 『国家と上座仏教 タイの政教関係』、北海道大学出版会、2017年</li> </ol>	
<b>吉村 誠 教授</b>		専門分野：唯識学，中国仏教
<b>研究内容</b>	玄奘（602—664）の事蹟を中心に、東アジアの唯識・如来蔵思想史を研究する。玄奘は『瑜伽師地論』を求めてインドに旅立ち、仏教研究の最高学府ナーランダに留学、帰国後は75部1335巻の仏典を翻訳し、唯識思想の体系を中国にもたらした。唯識は中国で独自の発展をとげ、韓国や日本など東アジア全域に広まり、今日でも仏教の基礎学として学ばれている。講義では、玄奘の生涯を『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』などの伝記資料で解明し、その思想を『成唯識論』や唯識学派（円測、基など）の著作から考察する。また、『大乘起信論』や華嚴学派（智儼、法蔵など）の思想との比較研究も進めてゆきたい。	
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』の成立について』（『仏教学』第37号）、1995年</li> <li>2. 『唯識の思想史的意義』（『新アジア仏教史 第7巻 中国Ⅱ 隋唐 興隆・発展する仏教』、佼成出版社）、2010年</li> <li>3. 『玄奘の唯識思想—その推定方法と二、三の特徴について—』（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第78号）、2020年</li> <li>4. 『新国訳大蔵経 続高僧伝Ⅰ』（共訳、大蔵出版）、2012年</li> <li>5. 『中国唯識思想史研究—玄奘と唯識学派—』（大蔵出版）、2013年</li> </ol>	
<b>四津谷孝道 教授</b>		専門分野：チベット仏教
<b>研究内容</b>	チベット仏教思想、特に後期伝播時代において主流となった中観帰謬派の様々な学僧たちによる「非有・非無」の中道理解を主な研究テーマとする。とりわけ、チベットにおける最も独創的な思想家の一人であるツォンカバによる「中道」についての解釈を視座の中心において、それに対する批判、そしてツォンカバを開祖とし、その思想に基づいて大きな思想体系を築き上げたゲルク派の中道思想を比較・検討してゆきたいと考えている。	
<b>研究業績</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <i>The Critique of Svatantra Reasoning by Candrakirti and Tsong-kha-pa -A Study of Philosophical Proof According to Two Praśan-gika Madhyamaka Traditions of India and Tibet</i>, Franz Steiner Verlag Stuttgart, 平成11年12月出版</li> <li>2. 「世俗と勝義の間で」、『駒澤大学佛教学部論集』、第31号、平成12年10月発行</li> <li>3. 「世俗諦と無明（I）」、『駒澤大学佛教学部研究紀要』、第60号、平成14年3月31日発行</li> <li>4. 「帰謬派の離辺中観解釈」、『駒澤大学佛教学部論集』、第33号、平成14年10月31日発行</li> <li>5. 「ツォンカバの中観思想—ことばによることばの否定—」、大蔵出版、平成16年11月10日出版</li> </ol>	